

雲仙岳災害に伴う生活拠点移動に関する研究

—— 自然災害を起因とする環境移行研究 ——

三浦 研・牧 紀男・小林 正美

STUDY ON RELOCATION CAUSED BY THE ERUPTION OF Mt. UNZEN-FUGENDAKE —— STUDY ON ENVIRONMENTAL TRANSITION DUE TO NATURAL DISASTER ——

By Ken MIURA, Norio MAKI and Masami KOBAYASHI

Synopsis

This study is concerned about the environmental transition experienced by 24 families, due to the relocations after natural disaster. According to the impact of the disaster and the degree of recovery of physical environment, adaption gaps were identified. Specially elderly people, who were traumatized by the disaster and "loss of community", could not arrange their residential space well. The successful relocation not only depends on the fact that their house had been reconstructed physically, but more importantly, on their participation in rebuilding their private territory. The most characteristic feature of the relocation in the example of Mt. Unzen eruption is the fact that the refugees had to abandon their home town involuntarily. On the way to recovery, people have to integrate the traumatic experience into ones on going life, and find meanings to life. A restoration house should be rebuilt in order to offer these people a chance to restructure not only their physical environment, but also to bring them the mental recovery.

1. は じ め に

本研究は雲仙普賢岳噴火災害に起因する災害復旧住宅への生活拠点移動を事例とし、24 家族の生活拠点移動（リロケーション）をケーススタディしたものである。

雲仙岳災害では我が国史上初めて警戒区域が市街化区域に設定され、噴火災害の長期化は多大な被害と同時に被災者に避難、移転による生活を強いている。当初は応急仮設住宅が主流であった災害後の住宅対策は、現在、応急居住から恒久居住の段階に移りつつある。仮設住宅が順次解体されていく一方、平成5年度末には公営住宅が総数約800戸が建設され¹⁾（Photo 1, 2），被災者用住宅団地の分譲も開始されている。（Photo 3）こうし

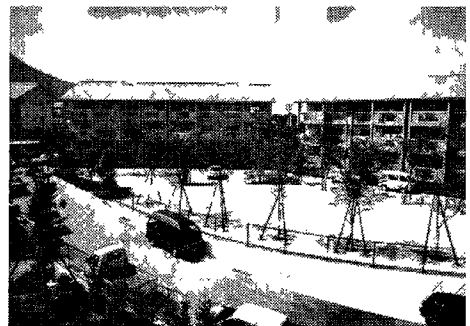


Photo. 1. Restoration apartment house



Photo 2. Restoration house



Photo 3. Rebuilt houses at a resettlement site

た事実を背景として、自然災害に起因する生活拠点移動が起きている。

自然災害は、それが一過性に終わらなければ、多くの人々に災害復旧住宅等へ生活拠点の移動を強いる。被災者は住み慣れた環境から離れ、新しい環境へ突如として身を置かなければならない。災害後の混乱の渦中に行われるこうした生活拠点移動は、コミュニティを含む人的環境、物理的環境の急激な変化の中で行われる。災害援助の一環とされる災害復興住宅は、復興への出発点でなければならない。しかし、現実には供給を優先して建設されるため、急激な環境変化に個別に対応する配慮は少ない。加えて、災害は環境の変化と同時に精神的外傷をもたらす。このため、新しい環境への適応は必ずしもスムーズに進むとは限らない。自然災害による生活拠点移動は、環境の不可避的移行の中で、心理変化を伴いながら行なわれるからである。(Fig. 1)

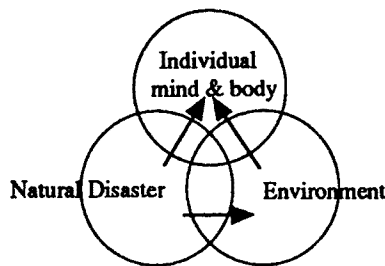


Fig. 1. Environmental Transition due to the Relocation after Natural Disaster

被災後の精神的な安定には、生活拠点である住居の問題は大きく影響する。本研究は災害後、新しい環境に人間が立ち向かう諸相、すなわち災害復旧住宅への環境移行（生活拠点移動）から、災害後の人間居住について考察する。

最初に背景となる生活拠点移動研究の方法について考察し、本論の研究方法を明確にする。次いで実際に事例を紹介し、論を進める。

2. 研究目的

人は全ての視覚世界に対して、意味を見出し、目に映る風景にも感情を持ちながら接している。特に愛する人と過ごした場所、思い出多き場所は、高齢者ならずとも、その人の生きてきた人生の軌跡である。つまり、すまいは単に物理的な存在に留まらず、人生の記憶を留める場所である。

また、ひとはすまいに領域を形成する。季節の花を飾り、気に入った絵を掛け、庭に生き物を飼うことで、自分の場所づくりを行う。これは日常はあまりにも当たり前なすまいへのアプローチであり、同時に自己表現でもある。

このように人と環境は密接な関係があり、すまいは職業、名前と同様、自我の一部である。

従って生活拠点を移動させることは、人に自我の修正を迫ることになる。別の環境へ移行する時、人は自らの生活領域を再構築しつつ、新しい環境に自己を見いださなければならない。

しかし、災害により両者の調和や統一が崩される時、日常は捉えにくい両者の関係が逆算的に明らかになる。

本研究は、被災後新しい環境に人間が立ち向かう過程、すなわち災害復旧住宅への生活拠点移動の諸相から、人間居住の本質について考察するものである。研究は以下のことを目的とする。

1) 自然災害に起因する生活拠点移動の特徴

自然災害後のリロケーションが通常の自発的引っ越し、高齢者施設への入居等、その他の生活拠点移動と比較してどのように位置付けられるのか、特徴を明らかにする。

2) 自然災害が新しい環境の適応に及ぼす影響

自然災害に起因する生活拠点の移動は、人的喪失、物質的喪失を伴う環境移行である。その後の領域形成がどのように行われているのか、新しい環境へいかに適応しているのかを調べ、環境の変化が人間に与える影響について考察する。

3) 自然災害に起因する生活拠点移動の心理過程

「住居喪失の影響についての研究はあるが、これらは悲嘆の心理過程などは扱っていない」²⁾とある。被災した人間は、悲哀の中から再び自己を取り巻く環境に立ち向わなければならない。心理学の喪失反応の研究をもとに、新しい環境に移行する際の心理過程を、事例を通して考察する。

3. 生活拠点移動研究の背景

生活拠点移動に関する研究は老年学の分野で発展を見る。1960年代の欧米において、高齢者施設への入居が、その後の死亡を早めること、すなわち“リロケーションエフェクト”と呼ばれる心身に対する悪影響に関心が集まり、主に施設入居が高齢者の心身に与える影響が研究され始める³⁾。以後、生活拠点移動は高齢者問題と並行して研究されることが多いため、老年学の研究では、死亡までの在園期間、QOL (Quality of life), ADL (Activities of Daily Living), モラール、痴呆化の測定等、心身の状態を表す指標が統計的に用いられ、それに基づいてリロケーションの成否が判断されている。

しかし、自立した個人の生活を営む生活拠点移動の場合、身体への影響を測ることは難しい。調査対象者は高齢者に限られず、多くの場合新しい環境に移動しても自立した生活には変わらない。また、自然災害によるリロケーションは、事前に予知できないため、移行前後の心理状態を心理指標を用いて比較することは不可能だからである。

それでは自然災害を起因とする生活拠点移動は、どのように測ればよいのだろうか。

4. 調査の概要

4.1 調査項目と分析方法

精神医学や災害心理学では、自然災害による心理変化に関する研究が為されている。これによると、喪失による悲哀から立ち直る過程では、感情を自然に表出し、新たな対象を得ることにより、自我を再構築することが重要であるという⁴⁾。

本研究はこうした災害後の心理変化を背景に、環境との関わり方の変化を調べる。新しい環境のなかでどのように自我を再構築し、生活領域にどのように自我が投影されているのか、その領域形成を中心に調

査は行われた。

(1) 災害前、避難中、現在について、住宅の利用状況等、構築環境を記録する。リロケーションの影響を論ずるには、どのような環境からどのような環境に移行しているのか、環境の違いを明確にすることが前提となるからである。

(2) 入居者自身が災害による生活拠点の移動、および移行後の環境ををどのように認識しているか。さらに災害による環境の変化(被災による仕事、人間関係の変化、家や家財道具の喪失等)が、どのように現在の環境の認識に影響しているのか、ヒアリングから聞き出す。

(3) 現在こころの安らぎを与えているものから、環境との関わりを考察する。人間関係、社会的環境が充実したなかで生活を送る場合は、こころの安らぎ、生きがいをもたらす対象が豊富にある。人的な関わり、社会生活、コミュニティ等。しかし、反対に生活が満たされていない場合、こころの安らぎをもたらす対象が、モノや狭い世界など極めて限定された無機質な世界に留まる。人がいかに環境と関わり合いを持っているかは、その個人がこころの安らぎをいかなる対象から感じているかが、重要な示唆となるからである⁵⁾。

(4) 被災前と現在の住居で、人間-環境関係の変化として、人間関係の広がり、すまいや周辺への意識、領域形成としての行為の変化を調べる。調査項目の説明は次項のようである。

(a) 移行前後の人間関係

家族、近所、友人・趣味の会等のつき合い、社会的活動によるつき合い、の4項目について変化を調べる。ただし各項目の判断については、調査対象者の認識による。(Table 1)

(b) すまい、周辺に対する意識、働きかけ

Riegel (1973) は人間と環境の関係を、人間と環境の関係を能動的 (Active) であるか受動的 (Passive) により4つに分類した⁶⁾。(Fig. 2) 本研究ではこの考えを参考として、すまい、周辺への意識、働きかけの変化を調べた。

すまい、周辺への意識に関する指標としては、永住の意思、遠慮なく生活できるか、その場所への愛着、窓からの景色を気に入るか、わが家と感ずるか、周辺をよく

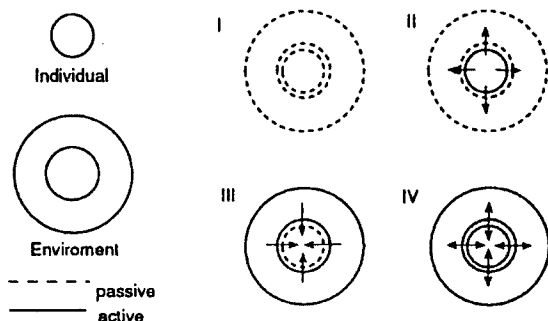


Fig. 2. Interaction between man and environment (Riegel 1973)

Table 1. Check list of Man-Environment Relation

〈人間関係〉	災害前	現在
親族、家族で親しい関係があるか		
近所で親しい関係があるか		
友人、町内会、趣味等で親しい関係		
仕事上の親しい人間関係があるか		
〈場所との関係性〉		
■ (すまいへの意識)		
住み続けたいと思うか		
家族に遠慮なく生活できるか		
愛着を感じるか		
窓からの景色を気に入るか		
わが家だと感ずるか		
■ (周辺への意識)		
周辺をよく知っているか		
周辺に愛着を感じるか		
■ (すまいへの働きかけ)		
自分の考えを反映した間取りか		
室内をしつらえているか		
気に入った家具を置いているか		
絵掛け軸等を掛けているか		
絵や時計を掛けないでいるか		
仏壇を置いているか		
釘を打っているか		
表札を出しているか		
室内に花や鉢植を飾っているか		
家族の写真を飾っているか		
室内に空けていない段ボールがあるか		
ペットを飼っているか		
室外に花や鉢植を植えているか		
庭をしつらえているか		
■ (周辺への働きかけ)		
散歩にでかけるか		
地域の活動に参加しているか		

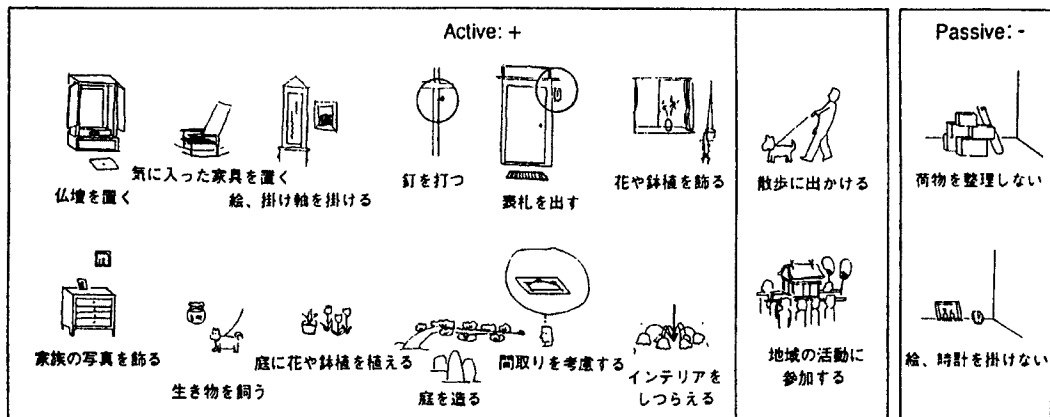


Fig. 3. Active and Passive activities to environment

知っているか、周辺への愛着の場所との心理的な結び付きを測る7項目を設定する。(Table 1)

また、すまい周辺への働きかけの指標として、表札、絵、写真、仏壇、花など、環境との能動的な関与を示す行為、受動的な関与を示す行為、16項目を調査項目とする。さらに、周辺への働きかけの指標として、散歩、地域活動への参加の2項目を選ぶ。(Table 1, Fig. 3)

災害前については対象者に尋ね、また現在については、実際に確認する。

これら3つの情報、即ち個人の認識、心の安らぎを得る対象に見る環境との関わり方、人間-環境関係の変化から、新しい環境へのリロケーションによる影響を分析する。(Fig. 4)

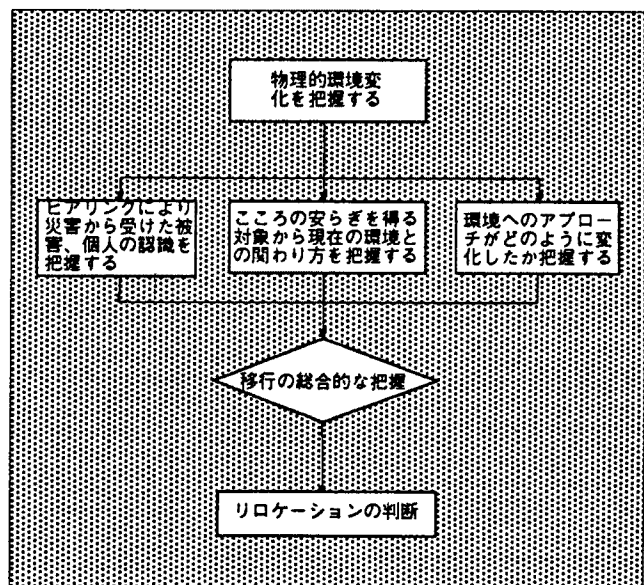


Fig. 4. Flow chart of the analysis

4.2 調査対象住宅

調査対象は島原市内に建設された 1) 公営住宅団地 (19 家族)、被災者の生活再建のために建設された分譲団地 (1 家族)、2) 個人的に再建した住宅 (4 家族) の合計 24 家族である。(Fig. 5)

(1) 公営住宅団地

公営住宅については、複数を調査対象としている。これは、それぞれ公営住宅の建設場所、年次が異なること、当初建設された公営住宅に対して入居希望者が多く、遺族、住宅全壊者、障害者、母子家庭等が優先的に入居したこと、住宅形式が県営住宅により木造2戸1形式、RC造、軽量鉄骨等、一戸建て(地域特別賃貸住宅)など多様であること、団地毎の事情を踏まえ、調査対象が偏らないよう配慮した結果である。

(2) 個人的に再建した住宅

調査時点(1994年8月)では被災者用一戸建団地は、1軒を除いて完成を見ていなかった。このため個人的に再建した住宅については場所の特定が困難なため、被災者用団地1軒を除いて市役所、町役場の紹

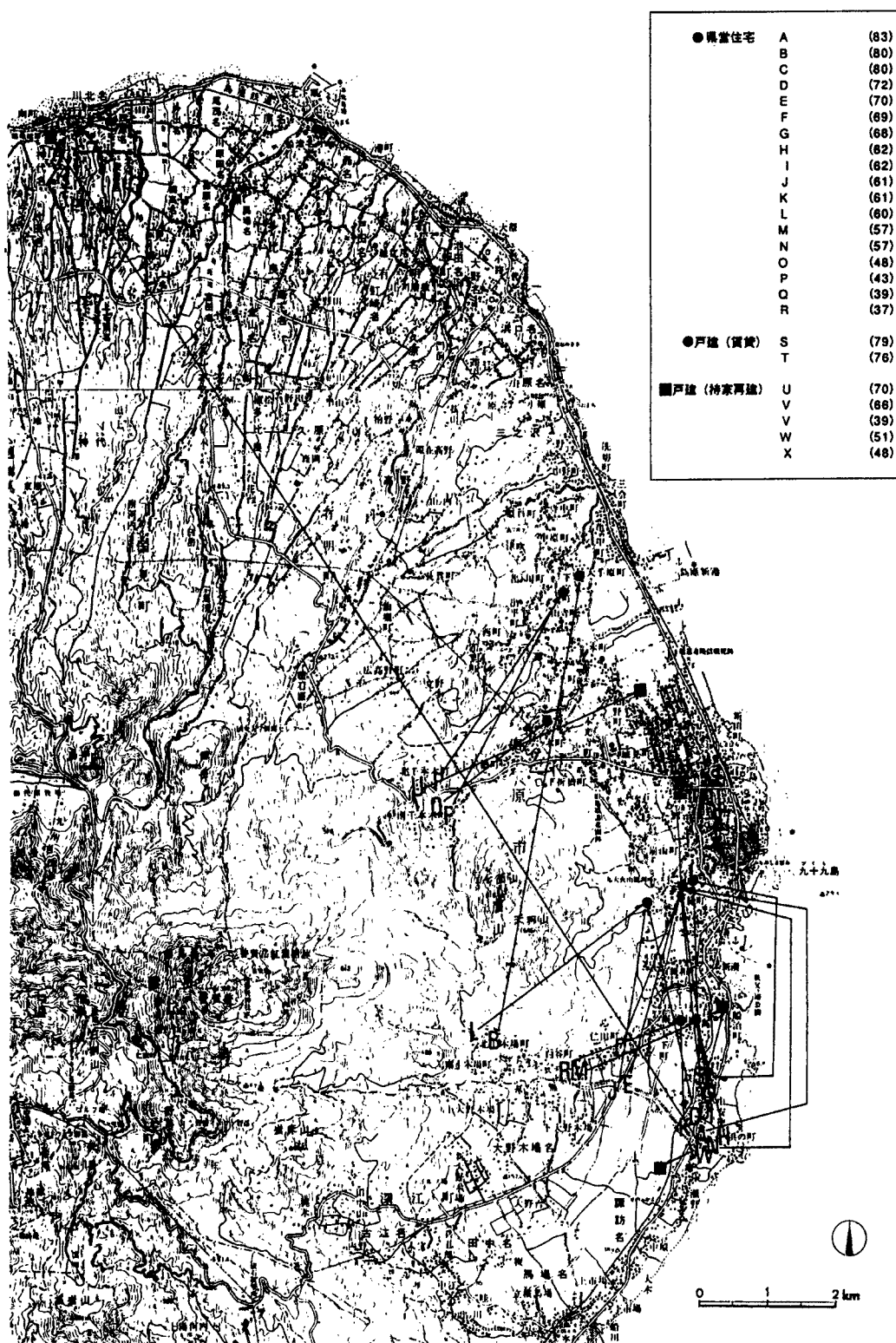


Fig. 5. Residential loci of 24 households

Table 2. The number of subjects at each Resettlement site

調査団地（住形式）	総戸数	訪問戸数	調査に応じた戸数
下宮第2団地（プレハブ）	20	4	1
稗田団地（木造2戸1）	30	8	2
杉山団地（木造2戸1）	68	8	1
花の丘団地（RC）	104	21	6
新山団地（RC）	36	10	3
魚見第1団地（RC）	78	12	3
大下団地（木造2戸1）	42	7	2
花芝山住宅（賃貸一戸建）	5	3	2
個人再建住宅	詳細不明	6	4
総計	383	79	24

介に拠る。

4.3 調査対象世帯

2回のヒアリング調査に協力が得られた世帯は、訪問した中のおよそ1/3である。（Table 2）結果的に調査対象者は、やや高齢者が多く含まれる。（Table 3）これは調査が日中に行われたことを一因とする。調査は事前に主旨を明記したチラシを配布した後、調査主旨に理解の得られた世帯に実施した。1994年8月および12月に同じ家庭を二度訪問し、前述の調査方法に基づき、同一人によるそれぞれ約1時間程度のヒアリングを実施している。以下、一部を紹介する。

Table 3. Age and Family constitution of the subjects

住宅形式	家族構成（年齢、性別）
県営住宅	83 M, 77 W
県営住宅	80 W, 60 W, 24 M
県営住宅	80 W, 60 W, 24 M
賃貸住宅	79 M, 78 W
賃貸住宅	76 W, 54 M, 52 W, 22 W
県営住宅	72 M, 65 W, 42 M, 37 W, 11 W, 7 W
県営住宅	70 M, 65 W
自力建設	70 M, 63 W
県営住宅	69 M, 63 W
県営住宅	68 W
自力建設	66 M, 64 W, / 39 W, 40 M, 15 W
県営住宅	62 W, 88 W, 66 M
県営住宅	62 W, 40 M, 38 W, 12 W, 11 W, 9 M
県営住宅	61 M, 63 W
県営住宅	61 M, 61 W
県営住宅	60 W, 37 M, 28 W, 0 W
県営住宅	57 W, 85 W, 66 M
県営住宅	57 W
自力建設	51 W, 59 M, 29 W, 19 W
自力建設	48 W, 50 M, 23 W, (24 M)
県営住宅	43 W, 42 M, 18 M, (19 W)
県営住宅	48 M, 48 W, (25 M, 23 M, 21 M)
県営住宅	39 M, 65 M, 63 W, 34 W, 9 M, 7 W, 6 W, 4 W
県営住宅	37 W, 38 M, 9 W, 8 M

* ゴシック体が調査対象者。

* ()内は学生の下宿などによる別居を表す。

* / は敷地内同居の2世帯のため、2人からヒアリングを得た。

5. 調査事例

(1) 事例考察1 (Fig. 6)

■ 県営住宅に入居し移住が上手く行かない例 (Aさん)

彼(83)も災害による喪失が大きい。すまいは幼い頃人手に渡ったものを、彼が懸命に働いて取り返した家屋であった。同時に住み慣れた家屋だけでなく、彼の職業でもあった農業も土石流被害で続けられなくなった。また家財も「ここは流れんばい」と小屋の2階に置いていたため、殆どを流失してしまった。現在の彼の住宅にある古い家具は、全て近所の人から「古いモノでよければ」といただいたものである。県営住宅は仮設住宅から「いの一番」に申し込んだ。しかし、現在の県営住宅は「仮のすまい」であり、「自分の家で死にたい」と思っている。現在はすることがない。昼間から飲む酒の量が増えたと奥さんは言う。室内は未整理の段ボール箱が置かれている一方、押入の中には物が収納されていない。時計も釘を打たないので、ぶら下げた状態。(Photo 4, 5) 彼は83歳と高齢で妻と2人暮らし。現在のこころの安らぎは昔付けた日記。こころの安らぎをもたらし対象が、人間との関わり合いではなく過去のモノに向かっている。

- 生活必需品を、他者から貰わなければならないのは、つらいことである。プライドと自尊心が強く、独

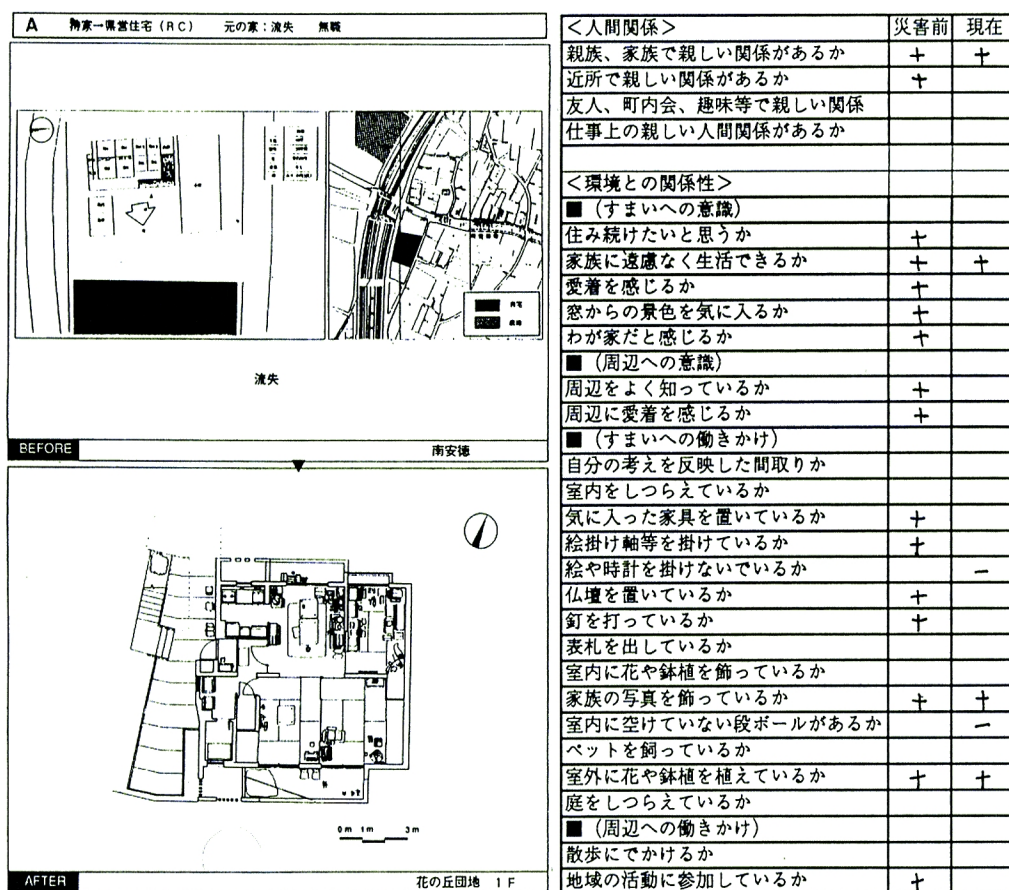


Fig. 6. Case study 1

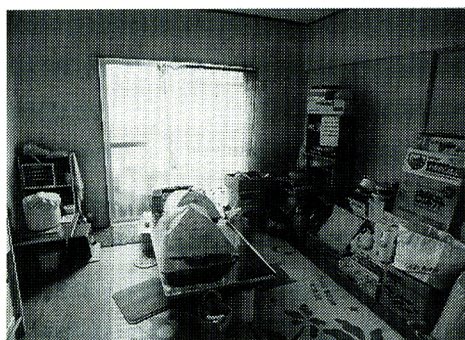


Photo 4. Piled up cardboard boxes in confusion

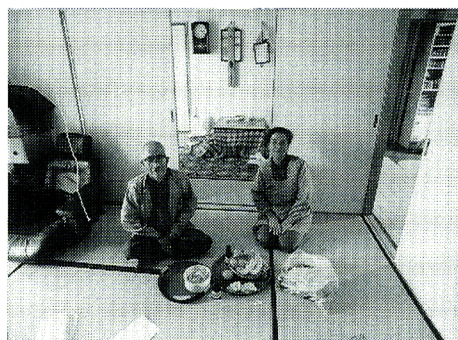


Photo 5. A clock and mirrors hanging on the hooks

立独歩の自己感を築いてきた者にとっては、この問題は特にストレスの原因になる⁷⁾。家財の殆ど全てを喪失した場合の移行は難しい。

(2) 事例考察2 (Fig. 7)

■ 県営住宅に入居し移行が上手く行かない例 (Bさん)

彼女(80)も災害による喪失が大きい。彼女の息子は消防団に参加していて6月3日の大火災流で亡くなった。同時に家屋も焼失した。最初に被害を受けた地域だったので、家財を避難させることは無理で

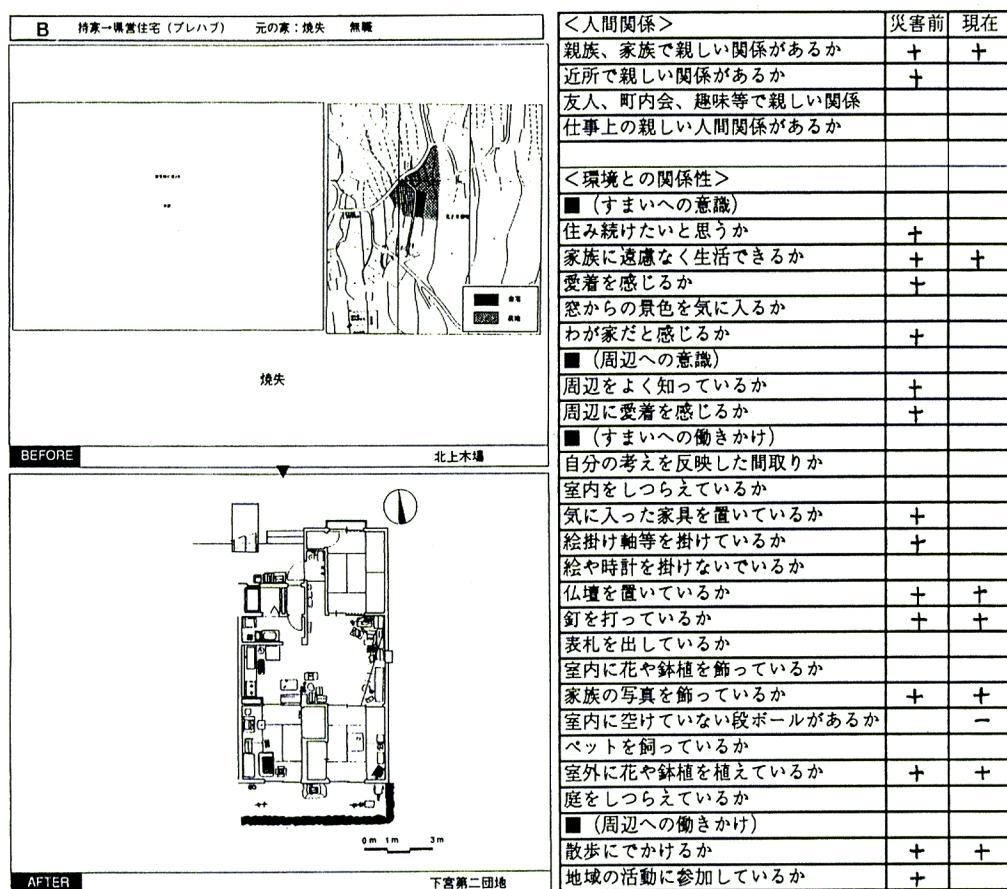


Fig. 7. Case study 2

あった。こうした喪失のため、彼女家族は被災者のなかでも優先的に県営住宅にH3年10月には入居している。家族は、亡くなった息子の嫁と、孫一人の3人家族である。家族内もそうであるが、人的な接触は少なくなった。何より上木場から9キロ離れた場所である。彼女は「来たくなかったが、家がないので有り難く来なければならなかった」という。近所は馴染みのない場所なので、散歩道は覚えたが買い物にも出かけない。彼女は一度も被災地に行けていない。このため「今でも本当だろうか」と思うという。現在のこころの安らぎは、隣に住む90歳のおばあちゃんと日中、アパートの廊下に腰を下ろして話すことである。入居以来3年半の月日が流れる。しかし、室内には段ボールや袋、など乱雑に積み重ねられている。(Photo 6) 団地の植栽も「こんなのはきれいじゃない」という。彼女のこころの安らぎには、人的接触がある。しかし、その対象は極めて限定された世界であるのも事実である。

- 室内に積まれた荷物の山は、新しい環境で生活する意志を感じさせない。災害で肉親が逝った家庭では、3年以上経過した現在もその影響は空間が再構成すらされないことに現れている。

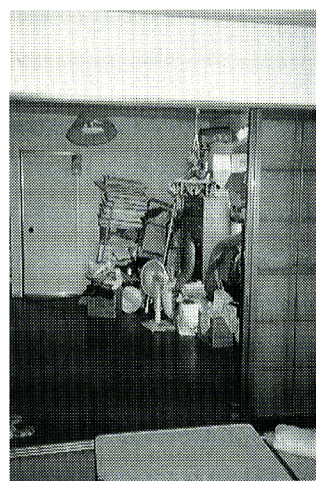


Photo 6. Piled up cardboard boxes in confusion with no hope and vitality

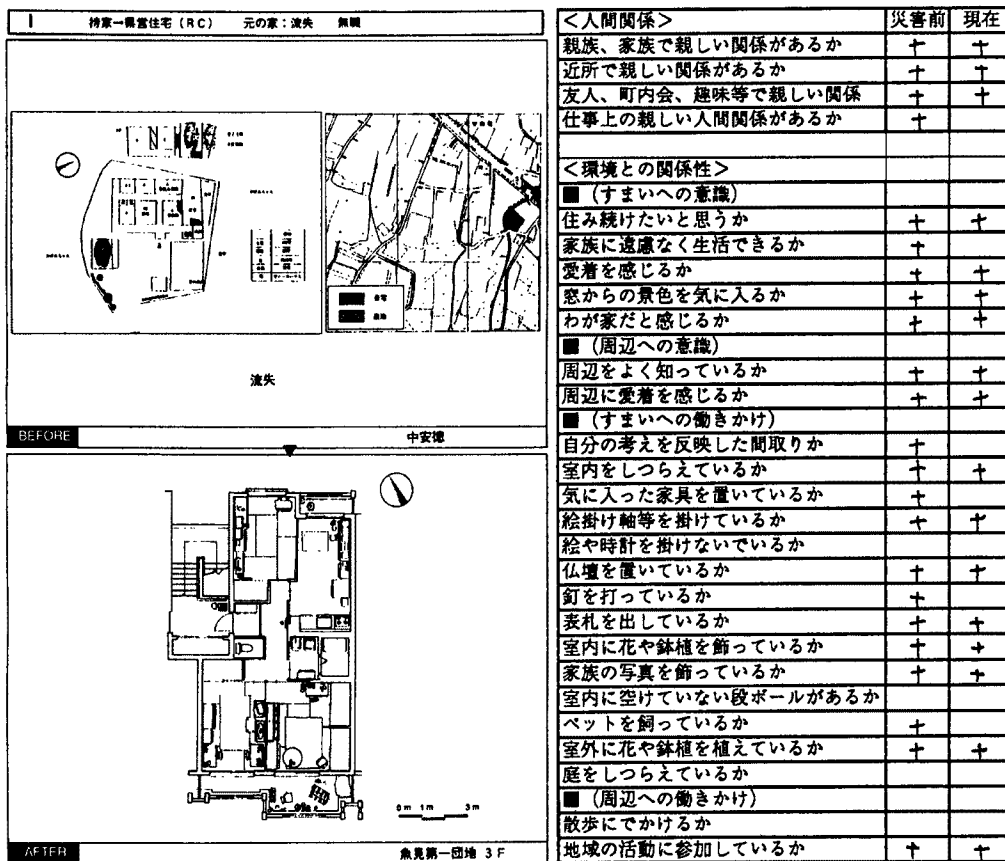


Fig. 8. Case study 3

(3) 事例考察 3 (Fig. 8)

■ 県営住宅への移行が上手く行っている場合 (I さん)

彼女 (62) は自宅を再建しないなかで、移行が問題なくいった一人である。

彼女の家は土石流に埋まる。自分が育った家だったので愛着も当然深かった。家が流失してから 2, 3 か月は眠れない日々が続いたという。家計の柱である息子の仕事 (建設業) はなんとか仕事を再開することができたが補償の対象に入らない。大事な荷物は一度警戒区域が解除になった時にいくらか持ち出せた。現在の県営住宅 (RC 3F) は昔の家から 1.3 キロ離れた場所にある。農業ができなくなった影響はあるものの、彼女は新しい場所で新しい趣味を見つけ、昔の近所の人と人間関係を維持している。以前は蘭の栽培を趣味と実益を兼ね行っていた。県営住宅に移ってからは、蘭栽培が出来ない。その代わり彼女はパークラフトの花細工を始めた。自宅に友人を数人集め、花細工を習っている。また、団地のベランダで鉢植えを栽培している。彼女は部屋の一角に机を置いて、そこを趣味の場所にしている。

団地の住人も多くが元の地区の人なので大体知っている。何より現在の県営住宅の隣は彼女の実家が入居している。すまいは「今度建てる時はこんな間取りでもいいね」と話すように、気に入っている。わが家だと感じ、愛着もあり、逆に自分のものにならないのが残念だと思う。玄関を入ったところには、避難の時「これは持っていかなば」と持ち出した家族でやったパズルが掛けられている。(Photo 7) 住棟が端なので彼女のベランダ (3F) からの眺めをととても気に入っている。お風呂から出た後、そこで涼むのを楽しみにしている。部屋は 9 歳の末孫 (男の子) と共同。しかし、亡き夫の仏壇を置き、ベランダのそばに花細工をやるテーブルが置かれている (Photo 8)。ベランダには夕涼みする時腰掛ける椅子が置かれ、

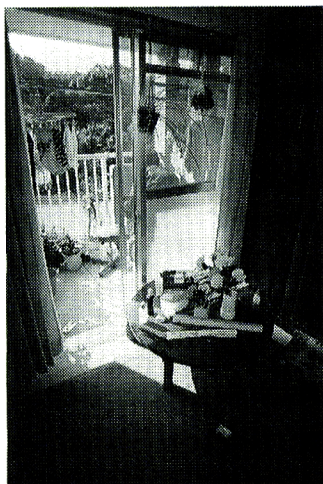


Photo 7. A memorial puzzle displayed on the entrance wall



Photo 8. Paper flowers on the table

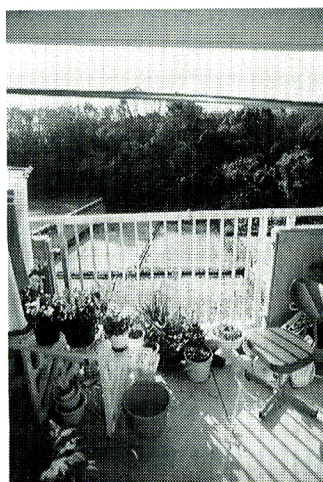


Photo 9. Her favorite terrace with nice view

側に鉢植えが多数置かれている（**Photo 9**）。こころの安らぎが友人とペーパークラフト。対象が人的接触を持つと同時に豊富である。

- 賃貸住宅に入居した場合も、自分の場所を創ることで現在に意味を見せている。

（4）事例考察4（**Fig. 9**）

■ 新しく家を建て移住が上手くされる例（Vさん）

彼（66）の家は敷地の一部が導流堤の拡張計画で買収された。自宅は土石流により徐々に埋まる。このため必要な荷物は取り出せた。生活拠点の移動に何よりも好都合な条件としては、自宅から600メートルの距離に畑を所有していたことによる。そこは水無川から近いこともあり、危険だと指摘する人もいる。けれど、彼は腎臓が悪く人工透析を続けるため、残された時間を考えて新しい家を建設した。息子家族とは敷地内で別居している。以前の同居と比較して互いに気を使わなくてもよい。面積的には昔の家と変わらない（昔の離れを除く）。彼は何よりも新しい家から海が良く見えることを気に入っている。縁側にはソ

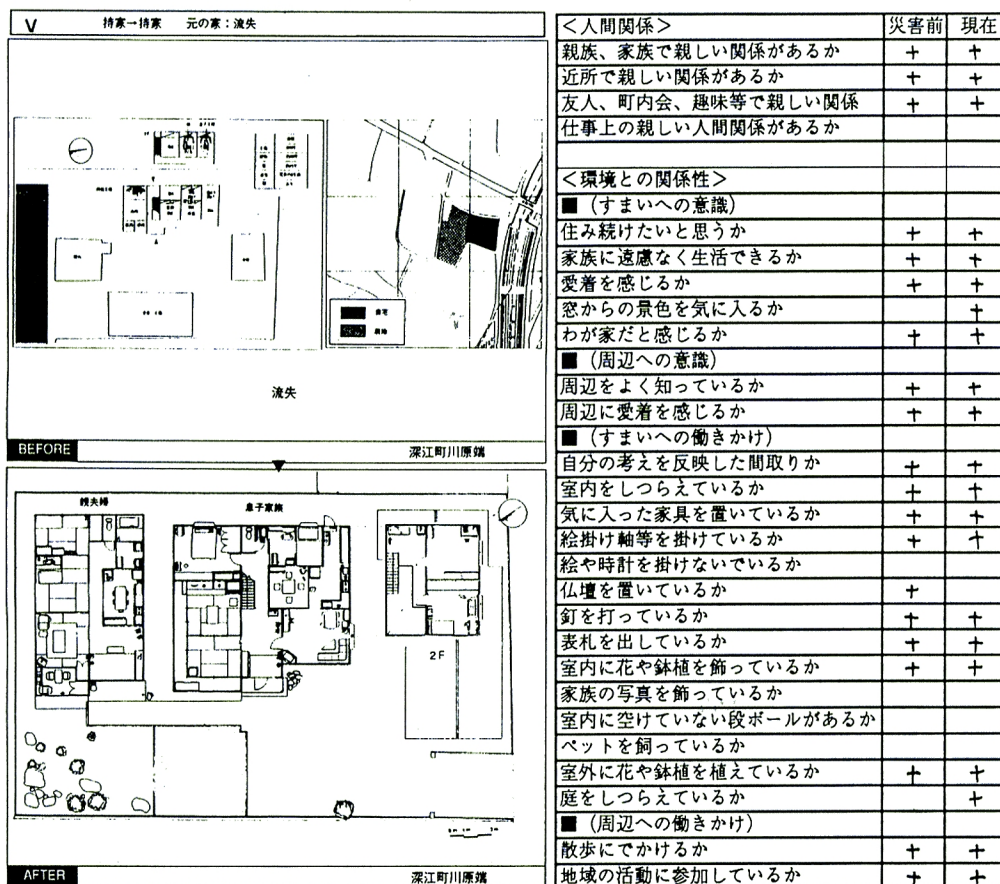


Fig. 9. Case study 4

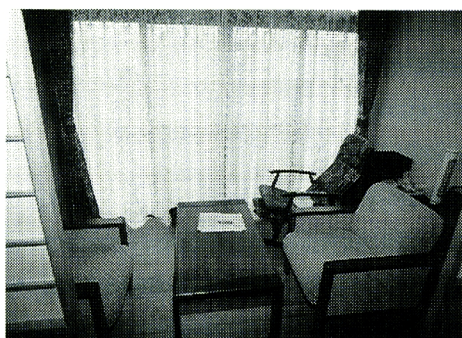


Photo 10. His favorite arm chair

ファが置かれ、そこで海を見て過ごしている。(Photo 10) こころの安らぎは、毎朝散歩を夫婦ですることと旅行。対象が行為であり世界が広い。

- 彼は空間の再構成をすることで、精神的にも安定した。避難中高かった血圧が、今は130程度に落ち着いたという。新しいすまいの方が、昔よりもよいと感じている。

(5) 事例考察5 (Fig. 10)

■新しく家を建て移行が上手く行かない例 (Uさん)

彼(70)は災害により50年近くを過ごした愛着の強い先祖伝来の土地から現在の場所に移ってきた。

夫婦2人の生活に変わりはないが、人間関係は総じて縮小した。近所の人もどこに住んでいるか分らない。ただ電話連絡のみ廻ってくる。彼は「家がないのに町が残っている」とつらく感じている。近所では裏の家のひとしか知らない。地域の行事もなくなり、外出も少なくなった。

すまいは避難生活に早く終止符を打とうと決意して建てた家だった。現在のすまいは仮設住宅と比べれば比較にならないほどよいと思うが、床面積は同じ程度でも、敷地が100坪から60坪に減少した。千本木(昔の家)では海まで見渡せたのに対して現在は隣家に接近しているため景色がない。また昔は居間から自分の畑の作物の生長を楽しんでいた。しかし現在は窓を開けても隣の壁しか見えないので日中でも障子

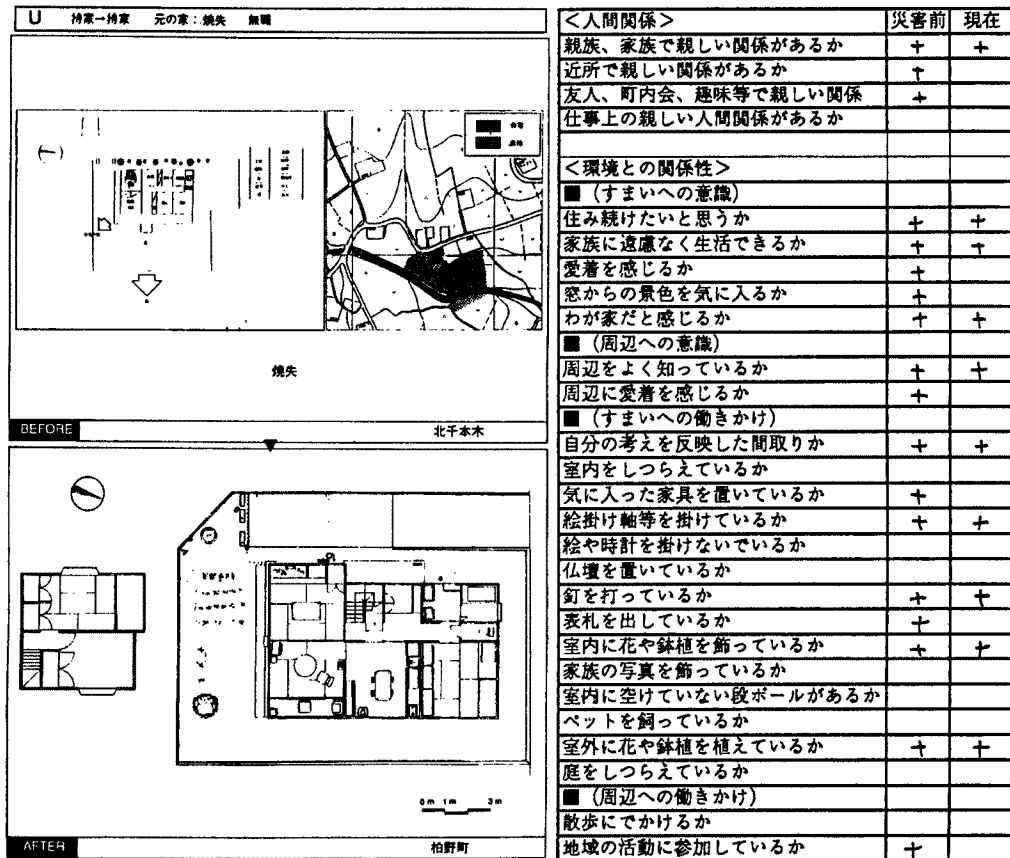


Fig. 10. Case study 5

を閉めている。また、ガレージを取ると欲しかった縁側や8畳の和室の続き間が取れなかった。彼は一度警戒区域が解除されたときに、仮設住宅から家財道具を昔の家に戻した。不運にもその直後に火砕流で家が焼けた。焼けるとは夢にも思っていなかったので、写真もない。残ったのは家財道具は仮設にある夏服とテレビと座敷机程度であった。このため直後は着るものにも困った。現在のすまいでは物忘れが多く、何をどこにしまったのか分からなくなることが多いという。

最近自宅近くに、より条件のよい土地が売り出された。今ならそこを買うのにと、現在の住まいを選んだことは仕方ないと思いつつも後悔が残る。「こんな家では人間は苦しい」と感じている。今の安らぎは市内の高校に通う孫娘がたまに寄ってくれること。安らぎの対象が人との接触であるが、孫娘が訪ねてくるのを待つ受け身の姿勢である。

- 彼は家財もろとも失ったこと、新しいすまいが自分の希望したものと異なること、近所が殆ど知らないこと、など環境の変化が大きい。このため上手く環境に自分を見い出せていない。

5.2 調査結果の概要

24家族の生活拠点移動で特徴的なのは、極めて上手く新しい環境に適応できている場合もあれば、逆に適応が上手く行かず、入居者自ら新しい環境を否定的に捉えている場合の両極が存在することである。

自ら住宅を再建した場合、4例中3例で新しい環境への適応がスムーズに行われた。こうした事例では、物理的環境の回復と同時に、移行した環境への働きかけが災害前と同じように為されている。また、人間関係の世界が縮小せず、仮に縮小したとしても、家族が支え合い、互いに移行を助けるプログラムになり

得ている。適応に関しては、自宅再建の過程に参加することが適応への準備をもたらし、物理的空間の再構築が精神的な自我の再構築に結び付いている。

同様に、県営住宅の入居者の中にも、新しい生活拠点が愛着の対象として認識されている場合は、すまいに自我が投影されている。

しかし、高齢、無職、単身、夫婦のみ、人的環境の喪失、家財の喪失等の条件が重なれば、移行先における物理的環境への働きかけは、災害前と比較して極端に弱く、新しい環境で積極的に生きる姿勢が見られない。また、仕事等、打ち込める新たな対象を見い出せないでいる。これは賃貸住宅入居者だけでなく、自宅を再建した場合1例にも現れていた。こうしたすまいでは、表札、花、絵など、すまいに自己のアイデンティティを表出するものが飾られず、生活空間に自我が投影されていない。空間的な自我の表出が進んでいないこれらの事実は、対象喪失の悲哀から回復していないことを結果的に表していると言えよう。

急激な環境変化の過程で、人的環境、物理的環境の両方を失ってしまうことに対して、人間は極めて弱い存在である。コミュニティ等の人的環境の喪失だけでなく、すまい、家具など、自己を一体化させていた欠け換えのない対象を失うことが、新しい環境を心理的に身の置き所の無い場所にしている。こうした事例は、自然災害後の環境移行の抱える困難な問題を示していると言える。

6. すまいの喪失とその心理過程⁸⁾

すまいには単に生活の場ではなく、その人の歴史を保存する追憶の場所である。このため自然災害により愛着のあるすまいを失うことは、過去の記憶の場所を失う精神的な喪失でもあり、その悲哀は肉親が逝った場合のように、人は悲しみを一定の時間プロセスを経ながら情緒的に受け入れていく。災害による住居の喪失の場合、被災地に赴き瓦礫を整理することにより、ゼロから空間を再構成していくことが、「喪の作業」⁹⁾の役割を果たしうる。普賢岳災害による生活拠点移動においても、被災者は同様のプロセスを経る。被災後に建設された公営住宅には、設備的に入居者は一定の評価を持つが、「わが家」とは実感していない。これは新しく家を建てた人が情緒的にも新しい環境を受け入れている場合が多いことと対照的にみえる。新しく家を建てる行為は、物理的な空間の再構築であるばかりか、精神の再構築でもある。被災者の持ち家指向は、再びわが家と思える愛着の場を確保することで情緒的な回復を求める悲哀の心理上にある。

7. 本研究の結論

- 1) 住み慣れた住環境の喪失は悲哀を伴う。ある意味、失恋、配偶者との死に別れと同じ心理過程である。
- 2) 移行は家族がそれを助けるシステムになる。単身者や夫婦2人よりも、支え合う家族が多いほど移行は上手く行きやすい。
- 3) 住み慣れた住環境を奪われ、はじめから新しい環境に適応できる人間はいない。ある時間断面で見れば、適応しているように見える人でも、その前には新しい環境を受け入れるためのプロセスを経ている。
- 4) 新たに住宅を建てた人の方が新しい環境を受け入れている場合が多い。敷地を選び、家族を考慮した住宅を建てる作業をすることで、新しい環境を受け入れる準備を自然に経験していることもこれと関係している。しかし、必ずしも家を建てれば満足するという単純なものではない。上手く行かない事例がこれを示す。
- 5) それまでの環境に愛着を感じない場合は、失った環境に対する思慕の念は弱く、移行に問題は見られ

ない。

- 6) 多くの場合は、昔の方が住宅面積は広いが、中には昔の方が狭い事例もある。この場合でも昔の住宅は被災者にとり大きな意味を持つが、環境が悪化する場合より移行はしやすい。
- 7) 県営住宅でも移行が上手くいく場合は、物理的な空間の再構築と同時に、新しい場所が愛着の対象として認識される場合である。
- 8) 被災者のなかでも住宅を失った経緯は大きく異なる。流失、焼失、警戒区域による立入り禁止、導流堤建設にともなう立ち退き等。しかし、家財ごと失う場合の悲哀は大きく、移行は難しい。逆に家が残っている場合は、仮すまいの意識が強い一方、残った家が精神的な安定につながる。
- 9) 現在の公営住宅に愛着を持ってない理由には、そこでの暮らしが短いこともさることながら、借りものの意識や、いずれ出て行くという内的対象喪失¹⁰⁾の意識が作用している。
- 10) 被災前鍵を掛けなかった19家庭全てで、仮設住宅等に避難して以来鍵を掛けるようになった。これはコミュニティの崩壊を示唆している。
- 11) 被災者の持家志向は、再び愛着の対象としての我が家を求める悲哀の心理上にある。

参 考 文 献

- 1) 長崎県：雲仙岳災害・島原半島復興振興計画，p. 52.
- 2) B. ラファエル著：1989，災害の襲うとき―カタストロフィーの精神医学―，みすず書房，p. 183.
- 3) 前田大作：老人のリロケーション・エフェクト，社会老年学，No. 16，pp. 3-9.
- 4) 小此木啓吾：1992，対象喪失，中公新書.
- 5) 野田正彰：1988，漂白される子供たち，情報センター；野田は写真投影法を用いて，被験者が写真撮影する対象から，個人の内的環境世界を明らかにしている。
- 6) 外山 義：1988，Identity and Milieu, A Study on relocation focusing on reciprocal changes in elderly people and their environment, Building Function Analysis, The Royal Institute of Technology, 1988.
- 7) B. ラファエル著：1989，災害の襲うとき―カタストロフィーの精神医学―，みすず書房，p. 211.
- 8) 野田正彰：1994，喪の途上にて，岩波書店.
- 9) 小此木啓吾：1992，対象喪失，中公新書，pp. 47-192；悲哀の仕事とも言われる。対象喪失を悼む営みであり，自然な悲しみのなかで失った対象と自己の関わりを整理することである。
- 10) 小此木啓吾：1992，対象喪失，中公新書，p. 35.